

一期一会in広島

路の標新聞

発行元

広島平和サイクリングの旅
2025



九人の視点から見る平和

この新聞名「路の標」（みちのしるべ）には、島の街を走る「路面電車」と、平和の願いを示す「石碑（道標・標）」の二つの意味があります。一見すると風景の描写ですが、読み進めるうちに、今も途絶えず続く、広島への「継承の意志が見える」構成を目指して新聞を作成しました。

三月二十六日と二十七日の二日間、兵庫県と大阪府の中学、高校に通う九人



磨きあげた石碑からみえる人々の思い

「世界に平和を」という目標を持ち、平和学習にのぞみました。一日目は、戦争当時の話を聞くことができるカフェ「Social Book Cafe ハチドリ舎」を訪れ、被爆者の高村秀樹さんから、当時の状況につ

が、広島のできごとや戦争の実相を学び、「平和」の大切さへの理解を深めました。また、「平和」を未来につなぐため、旅で学んだことを「周りの人に伝える」という目標を持ち、平和学習にのぞみました。

この春、僕たちは広島に行つて原爆について学びました。その中で僕が最も印象的だったのが原爆資料館

に展示していた『復興』という文字が書いてある旗です。『復興』という旗は当時

六十一歳の小原友次郎さんの思いが込められていました。

原爆資料館の『復興』と私の地元の戦跡では、昔の付着や風化で解説文が読めない例も少なくありません。

しかし、広島の実地では、文字が鮮明に保たれ、隅々まで清掃が行き届いています。訪れる人に「記憶を遠くまで届けよう」という、市民の強い意志を感じます。

焼け跡に希望を 願いを込めた復興の旗



ら、被爆遺構の説明を受けた後、広島平和記念資料館を見学しました。

二日目は本川小学校、原爆の爆心地、袋町小学校、

旧日本銀行広島支店を訪れ、原爆の悲惨さを改めて実感し、原爆に対する人々の思いを体感しました。

午後からはホロコースト

記念館を訪れ、ユダヤ人が受けた差別、抑留された収容所について学び、二日間の平和学習を終えました。

（玉田 暁大）

この内容は、被爆した日の翌日にみんなの復興を願う気持ちを込めて、自宅の焼け跡の金庫の上に、『復興』という旗を立てたそうです。

自分が爆心地から九百メートルで被爆して、倒壊した家屋の下敷きになったにもかかわらず、小原さんは、みんなの復興を願っていました。

困難な状況の中でも『復興』の旗を掲げ、人々を導こうとした強い意志や勇氣に感動しました。

原子爆弾が使われていなかったら悲惨な出来事は起こらず、何千人、何万人の命が失われなかったと思います。

戦争は街を壊し、人々の心に傷を残す、失われた命や物は二度と戻らない、現実の重さをサイクリングの旅に行つて改めて考えさせられました。（榊 翔多）

石碑の維持という、見学する私たちには、目に見えづらい活動が、記憶の風化を食い止める確かな「表現」だと私は感じました。

広島の実地では、「平和」を語り継ぐために必要な、日々の真摯な活動の姿勢を、私に教えてくれました。（玉田 暁大）

路の標新聞

復興は路面電車の音

原爆投下後三日で響いた音



広島市内を駆け巡る路面電車。広島に住んでいる人はもちろん、住んでいない人もみたことがあると思います。路面電車は広島では復興の礎になりました。原爆投下からわずか三日で運行を再開し、広島の人々の心を元気づけたのです。右の写真は原爆投下三日で運行した本物の路面電車です。

広島で必ず見かける「心が躍った人も多いの路面電車は、バスや普通ではないのでしよう通の電車とは違い、地か。しかし、路面電車に

は悲しい過去がありま
す。一九四五年八月六日
八時十五分、世界で初
めて原子爆弾が落とさ
れました。路面電車も
被害を受け、復旧に一
年はかかると思われた
中、驚くべきことに三
日で復旧しました。
なぜ、ここまで早く
運行できたのでしょうか。

つた人たちに路面電車
の音を聞かせて、もう
いちど希望を持っても
らうようにするため
に、ここまで早い復旧
になったんだと、聞
きました。

被爆した路面電車
は、今も広島市内を駆
け巡っています。その
姿をみると、当時の広
島市民の復興への思い
が伝わってきます。広
島を訪れたら、ぜひ探
してみてください。ナ
ンバーは六五〇番台の
平和を運ぶ路面電車で
す。(梁瀬 智成)

か。
今回ガイドをしてい
ただいた「sokoi
ko」サイクリングツ
アー」の石飛さんは
「原爆によって家族
や友人を失って、生き
る希望をなくしてしま

発行元

サイクリングの旅
平和の島
広島 2025

友達から平和へ 「もう恨みなんかないよ」

今回の旅で、広島駅
や平和公園についた時

に思ったことがありま
した。広島市の被爆遺構
を見学に来ている人た
ちのほとんどが「外国
人」でした。
ガイドの石飛さん
は、アメリカ人にこう
聞かれたそうです。
「日本人はまだ私た
ちを恨んでるの？」
石飛さんは、次のよ



うに答えます。
「僕たち、広島をガ
イドする仲間がいて、
そのガイドの一人が小
さいころ初めて原爆を
知ったんだ。気になっ
て被爆者のおじいちゃ
んに聞いてみたんだ。
『僕はアメリカ人が
原爆落としたのは許せ
ないよ。おじいちゃん

広島でたくさんの方
から「広島で起こった
こと」「広島での復
興」、そして、当時の
様子」を聞きました。

実際にその時代に生
まれていなくても、こ
時に思いを馳せて、当
時の世界に自分が存在し
ている、ということに



つながりから平和へ

感謝し、ガイドの石飛
さんに案内してもら
いました。平和の思いを
しっかりと伝えようと
して、石飛さんの
姿が印象的でした。
石飛さんの話で、特
に印象的だったのは、
原爆を広島に落とした
アメリカの人達から「
日本人達は私達をど
う思っていますか？」と
いう質問が多いこと
です。

私は「アメリカの人
達は、やっぱり私たち
に気を使っているのだ
ろうか」と、思いまし
た。

戦争に直接関わって
いない人達でも、広島
んな日常を過ごしてい
たか知らず、命令通り
に原爆を落とされたん
だ。じゃあ、おめえ
は世界中に友達を作り
な。そうしたら世界に
平和が生まれると思っ
たんだ。」

石飛さんは最後にこ
のようにまとめます。
「だから僕たちは恨
んでなんかいいよ。
だって今日友達になっ
たじゃん」
そういう発想はな
かったことを気づかさ
れました。平和は与え
られるものではなく、
一歩を踏み出して、い
ろんな人と友達になっ
て「自分自身で作って
いくものなんだ」と気づ
いた旅でした。
(西井 悠)

心をつなぐピースツアー



ガイドの石飛さんに
よるサイクリングピ
ースツアーでは、自転
車に乗って、平和記念公
園内や広島原爆病院な
どの説明を受けなが
ら、広島市の街を巡り、
被爆した建造物やその
歴史を教えていただき
ました。
訪れた原爆ドームで
は、かつての姿が分か
る写真と共に、広島
の歴史を学びました。
次に訪れた広島赤十
字・原爆病院では、原
爆の威力を実際に自分
の目で見て実感し、広

島の人々を助けた人物
についての説明を受け
ました。
このツアーでは、自
転車で街中を走ること
で、広島市の驚異的な復
興を間近に感じるこ
とができました。
石飛さんのお話で原
爆の悲惨さを知り、実
際に広島市の復興を目に
することで、広島の人
々を持つ、大きなパ
ワーを感じました。
このツアーでしかで
きない、貴重な体験が
たくさんできました。
(仲間 優芽)

の原爆投下で、どれだ
けたくさんの命を奪わ
れ、傷跡を残していっ
たか、記録を見れば分
かります。
その質問に対する答
えを、その場では思
つきません。
石飛さんの答えは、
「恨みも憎しみもあり
ません」でした。
石飛さんは続けま
す。「今日あなた達と
友達になった。だから
大丈夫だよ」
その言葉を聞き、
「平和を繋ぐのに能力
なんていらんない。目
前の命を大切に、繋
がりを持つこと、それ
が一番の平和への貢献
なんだ」ということ
に気づきました。みんな
がそれに気づき、勇気
を持つことができ、心
願っています。
(田中 文彬)
(藤谷 華音)

「華やかさ」一日で変わる



威力を証明する姿

「原爆」と聞いたら、原爆ドームが一番に思い浮かぶのではないのでしょうか。世界遺産となった原爆ドームは、当時、産業奨励会館と呼ばれ、デパートのような建物でした。さまざまな特産品や製品が、販売

展示されていました。広島は周りが海に囲まれているため、物資が大量に運び込まれてきたこともあり、このような建物が建設されたのです。

洋風な造りで夜になると、主要都市「広島」の華やかさが伺えます。

発行元

平和サイクリングの旅
2025

ひん曲がった歩兵銃

被爆した本川学校に残るそのすがた

本川小学校には、原爆の被害でボロボロになった「三八式歩兵銃」がありました。「三八式歩兵銃」とは、日本軍が約四十年間にわたり、使用した主要火器です。銃身は非常に長く、命中精度が高いことが特徴で、その歩兵銃のボロボロになる前が気になり、インターネットで調べました。展示されていたボロボロになった物と、インターネット

で調べた物と、インターネットで見比べると、展示されている物は、木製の部分が原爆の熱で無くなっていることに気づきました。



鉄で加工された銃身は、黒焦げになり、ひん曲がっています。そのほかにも、溶けてぐちゃぐちゃになったガラス

瓶や、鉄が溶けて他の鉄とくっついた鉄の塊など、当時の悲惨な情景を物語る展示がありました。「鉄の形が変形するほど

「将来必ず多くの人が広島を訪れる」と、丹下さんは思い、原爆ドームを残すため、最初にあるものを造りました。「広島原爆死没者慰霊碑」です。慰霊碑の奥には原爆ドームが見え、「原爆ドームがないと完成しない」このような思いが込められています。

一度はメディアで目にしたことがある原爆ドームは、平和の象徴になり、平和について考えるきっかけを世界中の人々に与えています。原爆の投下後に残った原爆ドームは、苦しく残酷な過去を蘇らすため、当時の人達は「壊してほしい」と、思っていました。

建築家・丹下健三さんは「平和を象徴するものを作って欲しい」と、丹下さんは依頼されましたが、原爆ドームは丹下さんの範囲ではありませんでした。「将来必ず多くの人が広島を訪れる」と、丹下さんは思い、原爆ドームを残すため、最初にあるものを造りました。

継承のピースライン

過去と未来をつなぐ丹下ロード



の威力を人につづける」このような殺意を持った兵器を使用することは絶対反対ではいけません。

「これからの未来で戦争は起きてほしくない」そう思いました。（上野 裕）

（田中 文彬）



発行元

平和サイクリングの旅
2025
広島

爆風と太陽の温度

ハチドリ舎で高村秀樹さんの被爆体験を聞く

みなさんがよく知っている広島原爆ドームの近くに、「Social Book Cafeハチドリ舎」というカフェがあります。ハチドリ舎では、戦争当時の話を聞くことができます。今回は、高村秀樹さんの被爆体験と、戦争当時の日本の状況について、ご自身の体験談を含めながら聞くことができました。



ハチドリ舎にはいろいろな戦争についての本がたくさんあります。壁のふせんには、「世界が平和になりますように」などが書かれています。「戦争のことをみんなで話し合える」一風変わった力

フエで、高村さんの話を伺いました。高村さんは、当時一歳で原爆が落とされた爆心地か

ら、約二・六キロの場所です。話の中で、「原爆の爆風の速度はジェット機ぐらいの速さ」「落とされた時の温度は六千度で、太陽と同じぐらいの温度」と言われていました。

このようなものが広島街に落とされたと思うと、

人間は結果だけで判断しますが、結果のプロセスを知ることで真実が見えてきます。研修や学校で見えないことが、今回の旅を通じて知ることができました（西井 悠）
広島大学の授業で必ず

「どれだけたくさん被害が出るのだろう」と、思いました。高村さんは、原爆が落とされた時に、壁が背にあつて火傷はなかったと言います。

害も続きます。たくさんの放射性物質を含んだ「黒い雨」が降りまわった。当時の人々は、のどが渇いていたため、黒い雨を求めた人がいました。「黒い雨」以外にも、放射性物質の影響を受けた人



たちはとても多く、原爆が落とされた一九四五年が終るまでに、約十四万人が亡くなったと言われています。戦争が終わってから、高村さんは被爆者として二〇一三年にピースボートで、

「核兵器廃絶」を求めるための活動に参加し、世界一周をしました。平和を伝える大切さを学んだことや、日本でこのようないき方をしたいと思っ

平和の思いを込めて

正しく過去を理解し、人間の多様性と向き合うことや、世界の未来に対する希望を学びました。少しの行動が小さな波紋をたて、世界を優しく巻き込めると思います。将来、精神科医になりたいと心から思いました。（田中 文称）
最初は初対面の子たちと、緊張と不安を感じていただけで、一緒に過ごすツトがないと思います（榊 翔多）
一番聞いて驚いたことは、路面電車です。当時の交通のツールであった路面電車は、原爆の影響で大きな被害を受けました。当時の家族を亡くしてうつむいている人たちが、「路面電車を走らせた音で顔を上げてもらう」その話が印象的でした。（中川 翔太）

標の記憶V①

時代を超えて続く平和への願い

行くことが、原爆ドームの話と聞きました。海に囲まれた広島は、物資が大量に運び込まれ発展したことで、産業奨励会館という建物ができる、後に原爆ドームになります。世界遺産の原爆ドームの真実を知り、歴

「核兵器廃絶」を求めた活動に参加し、世界一周をしました。平和を伝える大切さを学んだことや、日本でこのようないき方をしたいと思っ

ちには仲良くなったことがとても嬉しかったです。貴重な体験ができて良かったと思います。（仲間 優芽）
あつという間の二日間でも、もっと長く一緒にいたかったです。広島でいろいろなことを知る時間になりました。（藤谷 華音）
手入れた石碑や、被爆三日後から、今も現役で走る路面電車に深く感銘を受けました。日常の中で大切に使い続け、市民が石碑を掃除するなど、記憶を風化させない意志を感じました。（玉田 暁大）
原爆が落ちてから、三日で路面電車が復旧する驚異的なスピードに驚いたことや、自転車のツアーで原爆の威力と恐ろしさがよく分かりました。平和体験で、未来の戦争が起きないように平和のバトンを繋いで行きたいです。（上野 裕）